

4 melancholy appeal

ガルマがロンドン警視庁の本部に戻るとほとんど顔を見ることのない同僚の捜査員たちが揃っていた。最古参であるリチャード・バーマンが頭頂がやや寂しくなりかかっている頭を上げた。手にしている紙の束は資料と報告書だ。

「部長は臨時財務会議に出席している」

つまりは必要経費を上と掛け合っているということだ、美術品捜査は場合によっては犯人から買い取らねばならなくなるため、金がかかる。基本理念は美術品が無事に美術館の壁にあることで、犯人逮捕は二の次だった。この辺りが警察機構との軋轢を常に抱えることになる、そう、二世紀前のナシヨナル・ギャラリーの作品保存問題のように。

景観、保存、移転、鑑賞条件の鬩ぎ合いは国の誇るべき見栄だ、お陰で技術も向上し、専用施設も誕生したわけだが。

「…まあ、身代金を要求されてるわけでもないからな」

手を振る、進捗状況は良いわけでも悪いわけでもないらしい。

美術特捜班は、美術品を相手にする。デリケートではあるが人でないぶん、警視庁内でも浮いているような感がある。チームは少数で動き、未解決のものも当たり前に多く、数ヶ月から数年を要する。実績があるから無くならずになんとかなっている部署（的外れな某連邦の捜査局よりもキャリアはましだ）だ

が、国庫と同じく金はない。

「日本にそれらしきものが届いたという報告はあったのですが、それ以降の足取りは…」

「だろ、パーツが漫遊とばかりにこの辺りをふらふらしてやがる」

「イギリスに？」額縁でも出たのか？

「ジョイズが拾ってきた、いまはフランスだ」

と、バーマンは窓際に座りコーヒを啜る男を顎でしゃくつてみせた。四十そこらのレスラーのようにながちりした巨軀の男で、手にしたそれも上品なボーンチャイナというより娘が使うままごとの皿のようにしか見えない。無骨な武闘派と思われるそうだがこれが五カ国を操ることが出来るという妙にそぐわない雰囲気を持ったチームでも古参の一人だ。

「接触しようにも決め手がない、弟を連れて何かを探し回っているようだが…奴さん、どうも変なのにつきまとわれてな」

「班長、分らない」

横で大人しく話を聞いていた同僚の捜査員が手を上げる。祖父だかが日本人で、アジア圏における情報や滞在やらの手配のあれこれを行ってくれ、彼はイタリアのチームの一人を連れて香港に居た。サムライの血筋というやつなのか、彼の話す言葉はいつでも率直でわかりやすい。

バーマンは頷くとまあ座れ、と机に置いたマグカップを手にした。

「コービーは」

二人で遠慮する。

「あー」

演説者の発声にも似た声だ。考えるように宙に視線を浮かせ、まああつちには巨匠の贋作からだよな、と言った。『あつち』とはイタリア美術警察のチームを指している。

あるオークションに出品された絵画が贋作と分かった、元の所有者はしかるべき場所からそれを入手しており、贋作であることを知らなかった。イタリアのチームはそこで動き出していた。フェイクビジネスは年々巧妙に複雑化しており、捜査は黴臭く、足を使った泥じみたものが主流だが精密な科学捜査やデジタルも利用している。ネットで胡散臭く流れている情報の一つに有力な手がかりがあり、生産される場所こそ不明だが、贋作はまずアイルランドに流れているということが絞り込めた。そこでイタリアが合同チームを打診してきたのである。

怪情報が多い、懸賞金目当てに盗難された名画や裏取引の目撃情報など飽くこともなく飛び込んでくるが、どれも疎かにはできない、時間と労力を要する。だが、うちに有力な手掛かりが掴めたら捜査員を潜り込ませる必要が出てくる。アイルランドと言えばIRAでイギリスと思われるのかと、この話をされたとき、誰かが笑ったのを覚えている。

同時にイギリスの当局では極秘裏に依頼があった。ひと月前に就任したばかりの大臣の名を通じて、である。テート・ブリ

テンの作品が流れている可能性がないか捜査してほしい。初仕事とばかりに張り切った声だったらしい。突然に何をと誰もが不審に思いながらも指示された展示作品を丁寧に調べれば、フェイクであることが判った。大問題である、修復その他まで見事に再現されたレプリカが壁に掛かっているのだ、これには関係者の誰もが驚いた。作品を傷つけてしまうかも知れないが故、美術館側としてはどうしても行われなかった検査で分かったことで、部長が是が非でもやれと強引にやった結果だ。絵の具層の一部を大胆にも削り取ったのである。出た腹とその丸太のような体型からの据わりようは、なるほど、肝に通じた安定具合といえるもので、チームは贋作のルートを捜査すると同時に、ほんものの宝を探している。盗難美術品登録協会が犯行声明もない以上、報道によって捜査に支障をきたし、作品にも危険性が及ぶことがあるため待ったをかけ、美術館側は公表するのを控えて期限を設けた。メディアは犯人達を焚き付ける火種であり、思わぬ効果をもたらす広告一つでもある、いまは保険会社を通じて私立探偵が動いているだけだった。国の文化財の大スキャンダルに、警察機構の威信がかかっている。

「紛失したのは大改修のときだろう、貸し出しやら移動が頻繁だった」

テート・ブリテン大改修はそう古いことではない。慎重、かつ嚴重に管理されていたが、穴はある。

「倉庫に置いたときに埃よけに修復用の布を被せといたそう

だ、剥き出しに置かれてあるのに気付いたと警備員やらガラス職人が証言している。そいつと一緒に持つて行つたわけだ」

「よく聞けましたね。極秘裏つてやつなのに」

「パブでの世間話にすりや、二三杯でよく喋つてくれる」

表情も変えずに返す、聞かれなければ誰にも話さないことは思うより多くある、関係者の『そういえば』はいつだつて捜査のヒントになった。視点を切り替えるだけだとパーマンは言う、彼は情報のスペシャリストだった。しかも、穏やかそうな英国紳士の顔で足下を固めてから捜査を申告したりと揺るぎなくあらゆる面で太いボスにけしかけるようなこともする。今回もチームのリーダーを務めるにあたり、名言を吐いた——『戦争のどさくさで盗まれた美術品（戦利品）は、Fのつく集団にでも任せりゃいい』。つまりは国内のギャラリで盗まれた百数点の一の在処を探したい、ということにすぎない。

「大臣のそこには選挙前からタレコミがあつたそうだが、どうも無視してくれて、オークションのことがなけりゃ知らないまままだ、タレコミ元は今じゃわからん」

犯人の手がかりになつたかも知れないのに、とんだことをししてくれる。

しかし、マスコミもそうだが国民も盗まれたり傷つけられたりしてから騒ぐもので、大衆の多くは展示されている美術品のケアなどについて無関心である。今回も壁に掛かつてありさえすれば良いのであつて、指摘されなければ知らうともしなかつ

たのだ。

「埃よけつー布は特殊なつくりらしい。布の折り目をチェックするために作つたそうだが、オリジナルの絵の具やらに影響しないように電波を遮断する薬だかを塗つてるんだか横糸にしてるんだかで、ガンマ線に反応するそうだ」

「…ガンマ線は危ないんじゃないですか」

「それに反応するつてだけだ、俺らに扱えるわけねえだろ」

大学の先生に頼んだんだよ、と言いながら机の上を探る。本と調査書に写真、サプリメントの瓶、ペンやらが埋まつている、マウスが机から転げ落ちそうだ。

「ほれ、実験室とかで数値調べるやつあるだろ？ ガンマ線計測を応用してバネが飛ぶところをピックアップした」

そんなことを言われても放射線の一つで、X線と同じような電磁波ということくらいしか知識はなく、ガンマ線の計測方法など知らないで、ダウジングをする研究者の姿しか想像できない。手渡された紙の束はその報告らしく、広域で割と精度も高く調べられるらしい。オーロラというのも混じつていた、なるほどあれも電磁波である。

「カンバスを包んでいるなら面積が広いぶんわかりやすい、顕著なのはガンマ線だが、光や振動にも影響するんだそう。微量だが発する同形の波、これが一致するのが広いヨーロッパで二カ所しかなかつた」

と、写真を突き出す、薄汚れた厚手のカーテン地のような布

だ。見ようと思えばカンバス地に見えなくもない。

「見てくれはどこにでもありそうな布きれだが、恐ろしく優れたもののセンサーだよ」数年前に日本が医療用に開発したもので、館長が直々に見て注文に赴いた代物だ、とも教えられる。修復保管用の布きれが自分のスーツ何着ぶんなだつて話だとリッダーは写真を弾いた。

「一カ所はテート・ブリテンの保管用倉庫で、もう一カ所はイタリアだ。半日後には移動していた」

「移動？」

「まさしく聖布といふべきか」ニヤリと笑う、ヤニで黄ばんだ前歯が見えた。

聖骸布はトリノの聖ヨハネ大聖堂が保管している亜麻布が有名だ。が、神が捜査に何をしてくれるというのだろう。啓示か。

「日本で開発された布だから日本国内で流通するのはまああるだろう、移動する布は日本名の男が所持している。身分は学生」

「若いですね」

「そいつはその弟とで旅行している最中だ」

「布を持って？」

「わからん」

「何がです」

「無害だと覚しい一般市民のことが」

「は？」

「あんた、ここでそんなことを言うのか？」

「やつがどういふ思考、思想を持ち、どう関与しているのかがさっぱりわからん。単に捜査の網にかかった不幸な脇役かも知れないし、パスポート上では兄弟になっているが同行者も何の相棒なのか」

「違うんですか」

「弟の素性は知れた。何しろ、教会にせつせと葉書を送っているからな」

三年前に母親が病死、父親には連絡もつかず、親戚もなく修道院に預けられたが、しばらく行方知れずになっており、教会付けで役所にも届けがあるのが確認された。届いた葉書には名もなく、「親戚のお兄さん」とあるという。

「兄の方が知れない。イタリア国籍だが、背後に面倒なのがっているらしい」

財政界の大物やら身分をいう類だろう。この仕事をして十年にも満たないが、そんな壁が何度も目の前に立ち塞がって手こずらせてくれた。

これが写真、とどこかの施設の入り口の防犯カメラだろう、細身で長身の男の後ろ姿と、明るい髪色の十歳くらいの少年の横顔を撮影したスナップがカードのように差し出される。どの写真にも男の顔ははっきりと映っていないかった、しかし、少年は痩せてはいたが目つきに怯えや警戒もなく、なかの一枚は男を振り向いて笑っている。そのくっきりとした笑顔がいかにも年の離れた弟とそれを見守る兄という家族の肖像そのものよ

うに見えた。

「手荷物にスケッチブックはあるが絵はない」

粗いがわかる。手荷物は小さなボストンのみ、中には必要最低限のものしか入っていないように凹みが見える。丸めたなら絵なら折り畳んでしまえるだろうがそこまで調べられないのだろう。

「図書館や役所での検索、主にニュース記事なんだが、並べるキーワードが関連性を匂わせている。だが、手荷物に絵はなく、誰と会うわけでもない。普通に観光しかしてないし、変なのを引き連れている。男には別の目的があるように見える」

「……」他に仲間がいるのか？

考えられるのはそれしかなかった、そもそも絵がなければ汚れた布など持っている必要がないのだ。手元に戻るから包むのに手頃な布を捨てていないと考えるのが妥当である。手元に現品がないのでは現行犯で逮捕できない、その作品がそこになければ何の意味もないのだ。

「というわけで、まあ、男からだな。お前はこれから娘と荷物を迎えに行ってくれ」

「はい」

ドアが開いて部長が入ってくる、首をコキコキと鳴らすと本棚寄りの椅子にどかりと座った。何も聞いていないし見てもいないという顔をしているが、大らかを越える外見にしては繊細な性格だった。

「剥片一つでもありゃいいんだがな……」一人言ちるようにぼつりと呟く。

バーマンが示す『Fの集団』とは正義が大好きで、自国の邸宅美術館の盗難事件で辛酸を舐めた某国の捜査局のことだ、勿論彼なりの敬愛を込めての愛称である（所帯が大きすぎて残念だ、とも続くが）。同じ畑で田を耕す、ああそれでも囮捜査で泥沼化、あるいは窃盗団と交渉決裂、ドラマは明るいばかりじゃない。

ぼろぼろ欠片を落としながら行くのを手掛かりに進むなどまるでどこかの童話だ。

だが、自分たちがしていることはきつと同じようなもので、時間をかけ、手掛かりを拾いながら夢のような結末の行方を捜している。

「なるほど、『ファウスト』の姫君ですか」

骸の声と言った。

休日の家の電話に骸から入電などなんだそりゃって話だが、かかってきたのだから溜めていたものを吐き出すべく、ツナは電話を抱えて階段に座っている。

「ファウストは知らないけど、お前、あれどうするつもりだよ？」

「んー。どうしまししょうかねえ」

間延びした返事はものすごく投げ遣りな感じだ。ツナはお前のせいでこっちは浮いたり沈んだりしたんだ、この野郎と腹立たしい気持ちを抑えながら問う。

「無事なのか？」

やはり気になる。

黒曜ランドにもいないのは昨日、行つて分かった、報せたいことを千種には伝えたが骸様はどこにいるか分からない、と無表情にも言われたので心配したのだ。

「無事もなにもまあ、大ボンゴレの目はありますしねえ…命からすれば世界一安全かも知れませんね」

「知らないよ、何も聞いてない」

「プライベートだからでは？」

カチンとくる、プライベートって旅行でもしてるってのかわよ。

と、いうのは冗談で、とこちらのカチンの反応を待ち、手応えを確認したというように十分な間を置いて骸は続ける。

「いま全力で逃げてます。あの絵は彼らにとつてキーらしい」
なので優秀な僕でもなかなか。

また何かやってんだ、と思いつながら壁を見詰める。

「誰から追われてるんだよ」

「警察とマフィアとどこかの国の犯罪組織です」リコッタだろうがバルメザンだろうが。

「ほか？」

「君に言われるとは心外ですね、門外顧問のせいで一度頭にアノ空けたんですけど」

「……」

いつ、どうして。

「すれ違う程度ですが何かあったのでしょうか、まさかボンゴレが動くとは思わなかったですよ…」

いやに近い肉声にはつとする。

「骸…」

玄関のところの不遜な笑みを浮かべて立っている、見たところ目の色も相変わらずで服装も見慣れたもの、武器もなく、怪我も襲れている様子もないが有幻覚なのだろう、実際のところは分からない。

「相変わらず小さいですね、沢田綱吉」

「それ、なんか違う台詞思い出すからやめろ」

受話器を戻し、骸を見る。先んじて、母さんたちは買い物、何も出ないからな、と言った。

「アルコバレーノも？」

「昼寝」

首を横に振る、すべて断るのサインだ。昼寝だってリポーンは寝たら起きない。ハンモックによじ登る前に邪魔をしたら分かっているだろうな？と銃を突きつけられており、死にたくないので絶対に起こすまいと決めている。

骸はそうですか、と口では言うが顔が承服していなかった。ツナは敢えて無視する。

「仕事の帰りに子供を拾ったんですけど、その子供が後生大事に抱えたのがあの絵だったんです。絵は僕の中から見てワケありに見えました、子供は何も明かさなかったし、僕も敢えて訊こうとは思わなかったのですが…」

「リボンから聞いた、襲撃されたんだろ？」

「ええ。子供は秘密を知りすぎてましたから、絵と引き離れたんです」

あの子が、とツナは思い浮かべた。イタリアで目の前で撃たれ、倒れた、ツナとそう変わらない背格好だったように思う、いったいどんなことを抱えているのだろう。

「裏を探るつもりで一時的に君に預けて、落ち着いたら取り返すつもりだったんですがねえ…」

荷物一時預かり場所みたいな言い方だ。こっちはそれなりに気を揉んだのだ。

「予想以上に悪党どもに食いつかれまして、大人気になってしまいました」この能力と容姿も手伝ってでしょうか。

「……」

これで本気だったりするからな、コイツ。

「あんな、骸」

スルーして言うことは言ってやろうと電話をぶら下げて立ち上がる。

「クロームたち、襲われかけたんだぞ？」

突き出された電話を見て骸は不服げに腕を組む。ツナに言われたことよりもどうしてこのまま玄関などに居なければならいいのかと言いたげな顔だ。

「なんでそんなの渡すんだよ、運ぶなんて、そんな危ないこと何でクロームたちにさせるんだよ！ お前だって…」

「過去はね、いつだってうわがきざれているんです」

電話と共に押し返されてぐっと背中が反る。構いもせず骸はツナの体を押し遣るようにして家の上がると目を合わせてにこりと笑った。

「骸……」

「いい加減に、前を見たらどうですか？」

思わず電話を抱き締める、骸の顔は笑っているのに声は冷え切っていた。

「僕はまだ何一つし遂げていない」

「……『まだ』」

苦い思いで繰り返す。

「ええ。君を手に入れてませんから」

だけど、俺はお前とはもう戦いたくないんだ。

こんな不毛な会話を自分たちは何回続けなければならぬのだろう。いつだって平行線で骸と同じくそこはツナだって苛立つ。

「…話を戻しましょう」

そして、折れるのは必ず骸の方だ。

「ボンゴレとの関わりは多少はあるかも知れませんが。美術品の売買にマフィアはつきものですからね」

雲雀が言っていた、オークションで出品された傷物はすべてその手の組織が関わっていると。厳しい審査で知られた競売会社でさえも辿り着けない闇がぼっかり口を開けていて、そこから名画、名品が流れてくるというのだ、ぞっとしない話だ。

「まあ、それでも飾るくらいに興味しかないでしょう、一世の頃もまったく眼中にないでしょうから、それこそオールドマスターを貰っても画用紙に描いた子供の似顔絵と同じ扱いだつたはずですよ。欲がないのは君と一緒だ」

「知らないひとの性格まで捏造するなよ」

想像できますよ、と会ったかのような口ぶりだ。ふと口元を緩めてツナを見ると勝手に階段を上がっていく、電話を戻して急いで追った。

「骸」

「雲雀恭弥を巻き込んでいいですよ」

「は？」

「尤も彼のことだから自ら頭を突っ込んでくるでしょうが、君にはきつと手に負えない」

そんなのはもう巻き込んでしまっている。言いたいけど悔しくて言えなかった、そんな物だったら雲雀には言わなかったし、見せようなんてことも思わなかった。本物でした、と彼に告げ

たとき、笑いながら土産物でしたと報告できない事実の酷さに胸が痛んでならなかった。

——そう。

オークションと贋作、雲雀はこのキーワードに嫌悪を示すようで、リポーンでも何かを言おうものなら全力で副委員長の草壁が止めていた。

「あれが美術館から持ち出されたものだつて骸はすぐ分かったの？」

骸はしばらく黙ってから分かりませんでした、と言う。いい嘘を探すというより、より相応しい言葉を選んでいるようだった。

「…そんな気がただけです。絵画は不勉強ですが、どうも不自然でしたし、纏うものが普通ではなく感じられました。子どもに聞いても要領を得ないような応えで、僕が望むことは聞けそうもない。そちらに運べば雲雀恭弥かアルコバレーノが調べられるのではないかとこの公算もありました」

「お前…」

それは丸投げと言わないか。

骸は勝手知ったるというようにツナの部屋のドアを開ける。

窓は開いており、ディーノが持ってきてくれた絵は丁寧に油紙と新聞紙で包んでベッドの下に置いてある。

「これは、と思いましたが後は賭けです、あれが本物ならばからくりが動くはず。僕はその螺子に力をくわえて動かしてみた

かった」

螺子を回して歯車かよ。

「あれは、イギリスの、国立美術館にあるはずのものだ」

部屋のハンモックではリポーンが眠っていた。

「そうですか。：君はあれを知ってますか？」

「絵は見たけど、それが、有名なのは知らなかった」

「シェイクスピアも？」

「それは知ってる」名前くらいは。

骸はどかりとベッドに腰を下ろすと足を組む、その下に絵があるんだよ、と言わなかった。知ってもわざとやるんだろう。

「あの絵の消失が発覚したのは恐らくテート・ブリテン大改修の移動のときです。展示場所の移動や写真の撮り直し、修復箇所の確認などのどさくさで消えたのか、あるいはそれ以前かは不明ですが、作品が違うものだと分かった。それも日本への貸し出し時に、です。美術館はどう決断したか、——複製を送ったんです」

ツナも知っているイギリスの劇作家が書いた戯曲の登場人物を描いた作品が骸がツナに渡した絵の正体だ、紛れもない本物らしいが、果てない旅路をいく間にだまし絵が上に描かれ、更には違う女性に変身させられていた。つまりは修復も出来ないほど損なわれている。

「日本にはそれが贋作であるかなどの審査は許されていませんし、そもそもしかるべき手順を踏んで間違えようもない場所か

ら送られた名画を鑑定などする必要がありません。カタログや添付資料と合致しているならそれで安全なままに専門家という箔と一緒に積みあげただけで十分です」

それに。

「大事なのは、真贋よりも、その作品が壁にあるかないかということですから」

「そーだな」

リポーンの声がして起こしたかと見上げると鼻提灯だけがブウと膨れあがる。

「……」

ツナは息を吐いてドアに寄り掛かる、起きているんだか、寝ているんだか。

「そうして本物はマスコミに漏らさぬよう最大の注意を払いながら秘密裏に搜索を開始した。：ところでしょいか」

「ところって」

警察も食いついてますから、と骸は涼しいもので、まるで追われて人気者という自覚が見えない。

「何しろ脅迫状もなければ、交渉も売り込みもない、オールドマスターでもないものを盗む意図が分からない。確かにミレイですからそれなりにも価値もあるでしょうが、職員すら知らないままだったのですから、気付いただけでもラッキーですよ」

「……」

それはそうだ、こんなことをされた絵はもうないといい、あつ

ても少ないことを切に望む。

「でもその、改修のときに分かってたんなら、それで公表して
捜査とかすればいいじゃないのか？」

「うやむやにしたかったんじゃないですか？」

ツナは腕を組む。分らない、複製を飾っていていま大捜索
中ですといえはいいような気がするのだが。大人の事情ってや
つか？ なんだかいやだそれ。そもそも回り巡って骸が手にし
たら動き始めるなんて悪運というか出来すぎだ。

「絵つてもっと自由なものだと思つてた……」

「自由すぎるから国際犯罪のターゲットなんですよ」意識とし
ては遺跡の落書きとそう変わりません。

なかなか手厳しい見解だ。

「調べた人が気になることを言つてたつて、『術をかけられて
いる』とか何とか……」

「……。そうですか」

確かめておくことが増えました、と骸は確信めいた口調で言
う、それは結構とでも続きそうな様子だ。

「お前、楽しんでないよな？」

「ボンゴレを振り回すのは悪くないですね」

骸はクハハと愉快そうに笑い、君は頭の回転が早い方じゃ
ないんだから、あんまり考えない方がいいですよ、といらぬ
忠告をしてツナがグローブの用意をする前にすうっと消える。

まったくだ、という声の上から降ってきた。

*

「いいのか？ 中学生」

「あ、はは……」

まさかユニ似の親子に並盛商店街で会うとは思わない。剥落
してしまつた白を手にこの絵の具が売つてませんかと唯一画材
を扱う店を聞いて、どこのメーカーかと逆に質問された挙げ句、
勝手につけようとするのは感心しないと説教まで喰らつたその
帰りだった。

「表面くらいはつて思うじゃないか……」

溜息を吐く。骸の前に白が剥離しまくりました、とは言えな
かった。もともと剥剥しやすすい絵の具で、ディーノが言うには
どうしようもないのだそうだが、ツナとしてはやはり食い止め
たい。

ツナは熱々のコロツケを受け取ると、すいません、と頭を下
げる。

「学校帰りに買い食いなんかはダメなんだろうが、おごりだか
らな」

いやお詳しい、と恐縮してしまふ。並盛中は下校途中の買い
物は禁止されている、帰つてからの『おつかい』はいいのだが、
帰る途中に立ち寄つてというのは風紀上宜しからぬことで、バ
しると痛い目に遭う（でもたまにやる）。今日もそんなでツナ

は獄寺と山本に用があると言つて終わると同時に教室を出て、しかも文具を扱う書店と、画材店で二軒目だったりした。

「あの店のコロツケつてのがお気に入りだな」

父親はコロツケに齧り付く、娘も同じようにさくつといい音を立てていた。

「ガルマだ」

「あ、沢田です」

差し出された手を握り返す。力強く、厚みとあたたかみもある。あれも友人だろうか？

「獄寺君に山本……」

少女が二人を見付けると走り出す、獄寺と山本はおやという顔をした。獄寺はいつもなら無愛想なのに懐かしい知り合いに会うような顔になっていた。

「いいもん食つてるな」

ツナに気付いて山本が笑う。

「俺はいいって、ほら、こぼさず食え」

制服の袖を握り、懸命にコロツケを差し出す少女を獄寺は手を振って断る。

「……人生で二人目だな」

「え？」

ガルマが一人言ちるのように言う、いつの間にか二人分のコロツケを手にしてた。

「あの宇宙語つてやつか？ わかるのが二人目だつてことだ」

「ああ……」

「十代目」

「用つて買物だったのか？」

気恥ずかしいような思いで曖昧に頷く、先に帰つておいてこんなところで会つてしまうとは。

ガルマが歩み寄つてこないだの礼だと山本と獄寺にコロツケを渡すと、二人は遠慮なく、とぼくつく。少女が獄寺の手を引く、獄寺は困りながらもまんざらではない顔だ。

「話だけだぞ、娘に変なことしたら体に風穴開けるからな」

公園に送り出す父親は笑つてはいるが内容が穏やかではない。山本が獄寺が心配というわけでもねーけど、と言いながら二人の後を追つていった。

ブランコと滑り台と鉄棒、遊具が三種だけの小さな公園だ、ツナとガルマはベンチに座り、獄寺は誰もいない滑り台のところにしゃがみ込んで宇宙語でだろう、コンタクトを取り合っている。山本がそれを興味深そうに覗き込んでいた。

「その子にもお前さんたちみたいに懐いててな、よく一緒に遊んでた。もう7か8くらいになるかな、教会で隣に座つたつてだけなのに人見知りか妙に気が合つたらしくて」

「……」

少女は木片で土に何かを書いては獄寺とで空を見上げる、よく分からないが二人には意味のある行為なのだ。山本が説明を

求めている。明るい笑顔を見せ、誰にも物怖じもせずなつつこいのかと思っていた。

「誰だつて？」

「トモダチだよ、MJ11じゃねえぞ」

「そうなんだ…」

ツナは呟く。ちよつと見てみたいような気がした、獄寺と彼女のその友達、関わりのなきそうな三人をつなぐのはひとつの秘密めいた言葉だ。

「エキセントリックっていうか、よく遠い目をした。しょつちゆう物にぶつつかつたりして、ぼんやりしたところはあつたけど、不思議な魅力のある子だったな」とてもきれいな目の色をしていた。

あいつもそういうところ、ありそうだなとくつくつと笑う。獄寺が聞いたらどんな顔をするか、一緒にするなど怒るのかそれとも同士と喜ぶのか、曖昧な顔をしようだなとツナは思う。

「父親の手ほどきを受けたとかで絵がべらぼうに上手くて、似顔絵やらを描いてくれたんだが、いまでも宝物だ」とにかく可愛いくてな！。

「……」

あのとときの笑顔を見れば分かります、とばかりに頷く。

だから尚更、危険な目に遭つてしまうこの親子をツナはつい思つてしまう、たとえば後継者問題、とか。巻き込まれた身として大いに理解できるところだ。話題にもならないところから

して理由を聞いたところで答えてはくれないか、何も出来ないのかどつちかだろうが。

余計なことは一切口にしない、大人の男性というやつだ。父親も何も言わないけど、あつちは嘘を吐く。やさしい嘘とか、正しい嘘とか、ツナにはまだ分からない、怖がらせたくないからと本当のことを言えなくて嘘も吐けなくてハルや京子ちゃんを不安にさせたことは苦い思い出。本当と嘘との距離ははかることがとても難しい。

「オレは会つたことがないんだが、二人の共通の友達つてのがいてな」

「共通の友達？」

知りたかつたのはそこだというようにガルマはツナを見て頷く。芝居がかつてもいるようで、ツナはなんだかどきりとしてコロッケを落としそうになる。

「それが『ユニ』」

空想上のトモダチっているだろ？と父親は笑う。

「え？」

びっくりした、お前さん、ユニつて呼んだから。けるりと言つてベンチの横に仰け反るようにして座るさまはまるで映画俳優のようで、右手にコロッケだけど外国人だなあと思つてしまう。

「娘はユニに『声』を預けたそうだ、ユニからは『記憶』を預かつたんだと。もう一人の子は…なんだっけな、目と、なんだ

かの力の一部…だったかな」

「お前さんはそういうこと、ないの？」

「な、ないですよ？」

いやもう、あなた以上にびつくりしました、とは言えず引きつった笑顔なんか作ってしまった。だってそれはこの時代のユニではないのか。

「空想上つてことは会ったことがない…？」

「そうだ、ユニがどんな姿をしているのかすら分からない。どこかに浮いているのか、球体なのか、影にいるのかもな」

ガルマは肩を竦めてから紙くずを丸め、背中側のゴミ箱に投げる。風に流されもせずにはんと収まる、ツナが投げてもそうはいかない。

「その、もう一人の子はなんて言っていました？」

「訊く前に会えなくなっちゃった」

簡潔な答えに残念でしたね、とか、がっかりしたでしょうねというものありきたりすぎて黙って彼女を見るしかできない。寂しい思いを繰り返し、ここで獄寺と会えたのは奇跡に近いような気がしてくる。…なんてことないか。宇宙なんていう桁はずれたスケールの言葉だ、世界のどこかにきつというのだろう、ツナが思うよりも多く。正一くんとか宇宙語わかるかなあ、とぼんやり考えた。

「ああ。一応、言うか。もう会うこともないだろうからな」
横で立ち上がる気配がしてツナは隣を見上げる。

「仕事が一段落ついたから引き上げることになった」

「なんの仕事なんですか？」

ガルマは獄寺たちの方を見ながら答える。

「調査だな」

少女が父親に気付き、せつせと地面に何かを書き、獄寺が頷いた。

「世界のどこかにある宝物を探している」

宝物を探す調査、調査…記憶を繋いでいく、イメージが浮かび、目先はすつと博物館や教科書、寺社などに広がって答えが形となつて頭に浮かぶ、遺跡の写真に展示される出土品。あの美術館、博物館見学も無駄じゃなかった。

「あ、発掘とかですか」そうかあ。

相手は笑って返す、常にビジネススーツを着こみ、書類商談の類いに走り回るといいうのも分かるけれども、どこことなく感じる目の鋭さや、思慮深そうな振る舞いにあの時の機敏さを考えると考古学者という肩書きは彼にとってもよく似合うような気がした。

「世界中を回ってるんですね」

アドベンチャー映画のイメージさながらに口にしてしまう。

「またどこかで会えると良いな」

「はい」

少女が駆け寄ってきてガルマの足に絡みつく、ダンスをするようにひらひらとまとわりつくツナの方に来て、にこりと笑

顔を向け、滑り台を指す。可愛い花を見付けたと教えるようでもあるが、必ず見て欲しいのだと大事な何かを伝えようとしているのが目で分かった。

「ごちそーさまっした!」

「元気でな」

運動部らしい律儀さで山本は親子を見送り、ツナはひらひらと手を振る、数歩歩いては振り返る少女を獄寺は面倒そうな態度とは裏腹に見えなくなるまで見ていた。

「何話してたの?」

「宇宙と交信する仲間のことです、知り合いに分かるのがもう一人居たそうで」

獄寺ははきはきと答える、山本が目がきらきらしてたぞ、面白かったと笑う。見物だったのか。

「十代目に伝言だそうです」

そういうやと滑り台の下に行くくと、獄寺が教えてくれる。こめかみを掻きながらなんかユニのこと知ってるみたいで、と言いくそそうに続けた。

「十年後の?」

山本が問う。そうだったらすげーな、と言いたそうだった。

獄寺は違うと不機嫌そうに応えたが、それも正解ではないというようにうーんと、唸った。

「こつちのみたいなんですけど…、違うのか、オレにも分からなくて」

三人で足下に目を落とす、地面にはまたしても絵なのか出来損ないの文字なのか判読できないものが残されている。

「獄寺君わかるんだよね?」

こくりと頷くと、獄寺は意味を掬うよう棒で触れながら読み上げる。

—— 未来で待つてる。

副委員長の草壁が傍受した情報に因れば、と耳打ちをしてきたのが倒した野犬を檻に入れたときだった。武器に食らいついでなかなか剥がれず、根性はあつたが、麻酔も効かないのには眉が寄った。まるで凶暴化させて放したようなやり口に思えたからだ。

追跡調査の結果報告かと思えば連絡は思いがけない内容で、すぐさま沢田本人を呼び出すように言いつけ、雲雀は学校に戻った。言われたとおりに沢田は応接室に何があつたのかわからないという顔で座っており、緊張はその点だけ、とても某捜査線上に浮かんでいるとは思えない態度で用意させた茶を啜っていた。

「沢田」

走ってきたこともあっていささか暑くなり、襟元を緩めながら沢田の向かいに立つ。鳥が飛んできて雲雀の肩に乗った。

「えっと、こんにちは」

立ち上がって謝罪でもするように深々と頭を下げる、戻した顔を見たら、やっぱりわからないという表情をしていた。顔には怖いと書いてあるが、何かを隠している様子はない。

「目を覚ますんじゃないかったの？」

「覚めてますが…」

話にならない、でも決め手だ。

「行くよ」

それだけで十分な気がした、雲雀はいつも通りにきよとんとしている沢田の腕を掴む。

「どこに？」

腕を取られながら相手は焦ったように応える、でも授業が。

授業の心配が出来るだけ落ち着いているなら都合良かった。用意させたヘリが校庭に来るまであと数分だろう、赤ん坊はいないのかと沢田の周囲を見たが現れ出る気配はなかった。

「恩知らずの子供が見付かったっていうからね」

「……」

どれだ、という顔だ。どちらかという視線は肩の鳥にあるような気がする、沢田家にいるにぎやかな群れを頭に浮かべているだろう、期待しているわけではないが、勘が鈍いということに頷く。

「詐欺師か何かじゃない？」

「は？ ヒバリさん、何を…？」

いちいち相手に変化がないことを確認するようにしているのに気付いて、どうしたのかと雲雀の顔を覗こうとする沢田に投げつけた。

「二人連れらしいよ」

「こん…うわあ！」

バラバラと上空から音がして、風に粉塵が巻き上がる。窓に見えたヘリに問うことも忘れたようだ。

「イタリアで鉢会った子どもだよ」

「あ…」

思い出したらしい、沢田はすぐさま不安げな顔つきになる。

「あの、ヒバリさん。むく…」

「乗ってから聞くよ」

「えええ〜？」

校舎から出れば副委員長が待っていた。入国するためにはきまりがいろいろとうるさいので予め済ませておくように手配した、沢田に両手を上げさせてあちこちに装置を当てている、金属探知だ。前回、武器に取り上げられそうになって反抗したらディーノを迎えに来させる羽目になってしまった、あんな面倒なことは二度としたくない。時間だつて無駄になる。

「ヒバ、ヒバリ、さ…」

「ピー。」

「……」

ピンでもつけているのか。

上着を剥がせてヘリに乗り込む、空港に着いたらそのまま飛行機に乗り換える予定だ。心得たというように副委員長は頷いた。

「？ あれ？ ピーって」

「舌嚙むよ、黙って」

周囲の気配を探る、鳥は飛んで、ヘリの音に何かと不審がるものはあるが（証拠に近くの家の犬が吠えている）それらしきものはまだ動いていないらしい、隣には沢田綱吉本人。

機体が浮き上がって雲雀はそつと息を吐く。

「：それ、乗り換えるときにもう一回調べるから」

「はあ」

沢田は上着を手にも首を傾げている。上着なしでは鳴らなかつたし、そろそろ衣替えだから汚れてはないのかとそんなことを思ってしまう。しかし、金属があるうがなかるうが鳴らしてしまうのが沢田のような気がする。

「つて、乗り換え？」

これから空港に行き、そのままイギリスに行くと言うと沢田は聞こえなかつたかのような顔をした。

「どうしてイタリアで会ったのにイギリスに……」

聞いていたらしい、雲雀は腕を組む。仕方がないとはいえ少々窮屈だ。

「知らない」

雲雀は入手した情報を箇条書きのようにして並べる。

「病院にいるときに発信器をつけた、漸く反応したんだ」

「はっしんき……」

沢田は呆けたように繰り返す。目的は子どもにはなく、接触があるかも知れない六道骸で、ないならないでどこかで回収するつもりでいた。子どもが病院からいなくなつた時点で調べさせたが無反応のまま、昨夜あたりに急に与えられた使命でも思い出したかのように居場所を示し始めたのだ、弱く、途切れがちだが拾える、と副委員長は伝えた。

「名前はアラン。掏摸ヌスの常習犯で教会にいたのが行方知れずになつていた。教会では同い年の少女と兄弟のように仲が良かったらしい、二人でいろいろ悪さをしたそうだが、未解決の詐欺事件もひよつとしたら二人が絡んでいるのかも知れないと言われていたようだよ、頭は悪くないみたいだ。六道骸と会つたのも胡散臭い場所だつたのかもね」

沢田は何か言いたそうな顔をしてから俯き、そうですか、と答えたきり黙り込んだ。

「獄寺ー」

「んだよ？」

山本はあれ、と車道の向こうにあるテレビ画面を示す。いくつかのテレビのうち、右には画面一杯に花、左とその斜め上の

ものはアイドルが笑顔を浮かべて踊っている。ディスプレイでも特に目立つ大型画面のそれはニュースを放送しており、見たことのある顔が目の辺りを太く黒い帯で隠されているのが映っていた。

「……」

立ち止まって見詰めてしまう。

「十代目が、なんで……」

ツナは昼休み前に応接室に呼び出され、全校生徒が嘩然として行かされていた。雲雀なりに何かを考えて連れたのは分かるが、獄寺の方はイライラしっぱなしで、ほっというやれよと言っても聞きそうにもない、小僧でもいればなあ、と山本は溜息を吐き、結局放課後、彼に付き合うことになった。主を失った犬じゃないんだぞーと言いたいところだが、却って牙を剥かれてしまおうだろう、ツナの家でもほどほどのところで止めないと、何をするか心配だ。

そう考えていた矢先にこれである。

山本の思考は一瞬停止する、どういうことだかまいち飲み込めない。何かの事件の容疑者みたいに目を隠しただけの親友の顔写真が映され、続いて書類の束が押収品として、また、名前だけ知っている大手学習塾の玄関写真が出てくる。テロップには酒賀容疑者が勤めていた学習塾、とある。
「……の、じけんの、かんけいしやとして……」

獄寺は画面を睨むように見詰め、音声の聞こえないキャスターの言葉を唇を読むことで拾っている。声が震えている、怒りなのか、それとも動揺なのか。

「んなわけあるかよっ！」

「獄寺！」

居ても立つても居られなくなったのか獄寺は走り出す、ツナの家に向かうのだ、彼はいま家にいるのか、それとも警察が？

山本だって心配だ。

走る横を黒い影が掠めて肩に触れた。ぎくりとしたが構っていられなかった。

「ちゃおっす」

「リボーンさん！」

「小僧！」

わずかな救いを見た思いがする。

「十代目は?!」

「ニュース見たか?!」

飛び出る問いにリボーンはこくりと頷く、まあそう焦るなどでも言いたげだ。

「家にツナはいねーぞ。半径五十メートルにボンゴレの警戒網を張った、お前ら飛び込むなよ」絵もあるしな。

と、聞いたところでテレビの中継車らしい四角い車が横をツナの家とは真逆の方向に走り抜けていった、左方向にも周回軌道を挑んでいる最中と言いたげなバイクのエンジン音が近付い

ては遠ざかる。つまりは辿り着けないらしい。向こう側ではうわあ、と男の叫び声が出て、ばたばたと数人が逃げ去っていくのが分かった。

「ヒバリから連絡が来たんだ」

リボーンは周囲の不自然な様子を意に介していない風に見える。山本は黙って顔を掻く、幻覚なんだろうがこの場合、小次郎を呼び出していいものか。

「ツナを連れて行くってな」

「…え？」

速度は緩んではいたが獄寺はそこで足を止めた。

「ちなみにボンゴレバリアは都合によりハルや京子を含めたご近所の皆さんには適用されないぞ」

「じゃあなんでオレらは適用されるんだよ…」

「そうっすよ」

さあ、とペろりと舌を出す小僧は只者でないが、仲間にもこれはひどい。獄寺は目に見えて肩を落としているようだった。

「ヒバリのやつどっかで面倒なのに接触したんだな、感心した」

リボーンは山本の肩から堀に飛ぶ。きらりと光るものがあった、なんとなくボンゴレが用意したものだと思われる、そうではなくとも子ども達やリボーンが害意あるものからツナの母親を守るだろう。

「感心しないで下さい、リボーンさん…」

「でも、平気かよ？」

心配か？とリボーンは山本を見る。当たり前です、と獄寺が答えた。

「ヘリで誘拐されたきりだし、よりによってヒバリとなんて…」

獄寺の場合は信用できる人間の方が少なく、心配は自分以外の誰でもそうで、信頼しているのはそれこそリボーン、護歩してディーノ、ボンゴレのごく僅かな人間くらいだろう。

「追っついてーぞ？」

リボーンは帽子のつばを押し上げながらさらりと言う。

「こっちでツナの疑惑を晴らしたらな」

「……」

山本は頷きかけて実際に何をすればいいのか、何が出来るのかと躊躇う。獄寺が食らいつく覚悟なのは隣から伝わる気配からして判る、下向きだった意気がぴんと跳ね上がるのだ。ツナがトップにいる彼にしてみれば自明のことで、小僧はこーいうのほんと上手いよなと思ってしまう。

「ヒバリが、金属探知であいつの制服にマイクロチップ付きのステイックが刺さっているのを見付けた」全然気付かなかつたみてーだな。

「マイクロチップ…？」

山本は聞いたことがあるようなないような単語を繰り返す、少なくとも食物ではない。情報を詰め込んだ小さな媒体だった

はずだ。認証などに使われると聞いたことがある。

「オレはこれからヒバリんと共に取りに行く」

山本がオレも、と足を踏み出すのを獄寺がよせ、と腕を引っ張って止めた。

「…十代目はヒバリと一緒に居て、まだこのことは知らないんですね？」

リボーンは恐らくはな、と答える。

「知ってるお前が行ったら、十代目は感付いちまう。悔しいがヒバリに任せるしかねえ」

「できるか？ 獄寺」

「はい」

獄寺は力強く頷いたが、強張ったその横顔は脆く、無防備ささえ見えるようだった。ひと呼吸のうちに山本の腹は決まる、ツナのためには彼と一緒に居た方が何もかも上手くいく。それは自然の法則にも似て、直感だけかなり確実性のあるものなのだ。

金属探知機を鳴らしたのは鍵だった。ツナはほっとする、雲雀にむんずと掴まれて上着を脱がされた日には泣きそうになっていたのだ、泣かないけど。でも怖いようで上着の中を改めることは出来なかった、リボーンから何か仕込まれてでもいたら

指輪とグローブぐらいで許して下さいと土下座しそうだ。

「これなの？」

雲雀は詰まらないという顔で鍵を目の高さを持ち上げる。

「大事なものだから、一応持っておこうと思って」紐を通して首から提げるかポケットに入れておくようにしていた、雲雀はふうんと頬杖を突く。

身につけてはいたけど、雲雀が興味を示したからなんとなく価値がいつそうあるように思えて持ち歩いているのだとは言えなかった、相手は鍵を返すと腕を組んで小さな窓から外を見た。

出発の準備はほぼ済んでいて、給油作業を終えたらすぐに出ることになっている。行き先が変更される場合もあるので燃料は想定しうる長距離の地点にしたと副委員長が教えてくれた。彼は、というか風紀委員の人は本当によく働くなあとと思う。空港にも待機していたし、ひよっとしたら行った先にも居るかも知れない。…とても同じ中学生とは思えない。

「……」

そろりと雲雀を見るとくあと欠伸をし、手足を伸ばしている。へりはツナさえ狭さを感じたのだから群れるのを好まない雲雀にとつてはさぞや不快だったに違いない、流石に長距離を飛ぶものになると広々とする。特にプライベートジェットなのだからゆったり感のレベルが違うのだろう、能面じみた無表情さではあるがリラククスした様子で、手元には読みさしらしい文庫

本があった。

「ランプが点いたら出るから」

と、告げる。ツナもフライトの心構えは出来ている、地面を離れる前のこの短い沈黙は、緊張も手伝つてか気詰まりなような気がして、ツナは必死に言葉を探す、モツツアレツラカリコッタファミリー？ それはツナが嫌だ。思いつく話題は残念ながら手元のそれしかなく、つつかえながらも口にした。

「し、新刊が、そのっ……」

「？」

なにそれ、という顔。

「オレ、絶対に、誰にも、言わないですから！」

これは言っておくべきだ、重要なんだから。でも、気持ちの悪い汗が噴き出して体がガチガチになる。間違ひなくセレクトは失敗だ。

「本？ 本が何だつての？」

雲雀は上半身を浮かせると面倒そうに返す。

「あ。いえ…その…」

いきなり言われたんじゃ分かるわけないだろ！と思つたが、言おうとすると顔が赤らんでしまう。震える指で雲雀の手元を指した。

「読んでたじゃねーか、きらきらした表紙の少女趣味な本を」

そういう趣味だと知らなかったぞ。

「うわ！ リボン！」飛ぶ直前に！

雲雀は表情も変えずにリボンを見返すと、そんな本知らないけどと突っ返す。声からして機嫌が悪い、そうですよねとも言える雰囲気ではなかった。物凄く居たたまれない、空気を見事にぶち壊してくれた要らぬ代弁者はすたすたと出口に向かっている、ちよつと待て。

「じゃあな」

「え…」かなり待て。

「うん」

雲雀はリボンを一瞥すると背もたれに体を預け、指を組んでから思い出したようにぼつりと言った。

「丁度没収した本があったから、副委員長がカバーを使った」

「……」

ツナは雲雀を見る。

「沢田」

「は、はい！」

ぴしりと背筋が伸びる。

「君さ、もしかして安直に鵜呑みしたわけ？」バカじゃないの？

「あー…」

早とちりですか、そうですよね。と、詫びの言葉を口にしようとして遮られる。

「あれ、中身も読んだけど、正直よくわからなかった」

「あー…」語尾は急降下する。

なんでそんな紛らわしいこと…。あ、いやいや。でも読むん

ですね、どう言えばいいのかわからなくなりました。リポーンも足が止まっています、いつともうイギリスに連れて行きませんか？

「分からないけど、知ったことは多くて」

と雲雀はちらりとツナを見る。何か返さなければと思うが無難な言葉しか出てこない。

「そ、そうですか…」

じゃないよ。

「絵が隠れていたなんて考えなかった」

「…え？」

「カバーと同じさ」

あ、と思うとリポーンが飛び上がって視界から消え、ベルでも鳴らしたかのような高い音を立てて出発を告げるランプが点灯した。

「中身を隠すために、あの絵は上に別のものが描かれていた」

「……」

雲雀が、確認するように言うのをツナは頷いてみせる。

「君が見たのは赤外線写真でだろ」

これにも頷く。リポーンが改めて行った鑑定ではオリジナルは分かっていたものの、修復は難しいとされた。白い部分を剥ぎ取り、下にあるだまし絵のひび割れた絵の具の層に這入りこんだニス、剥離は可能だが特殊な溶剤が混ぜられているらしく、大事な部分の絵の具をこそぎ取る可能性もあり、出来る箇所とそ

うでないところが出てしまい、鑑賞作品としての価値を失ってしまうこともあり得る。つまりは完全な復元は不可能。

しかも、調べるため絵によくないと言われている光線を大量に浴びせてしまった。

「絵が隠れているのは分かっていたけど直す方法はないと思っっている」

お嬢様は魔法で隠されたまま、剥げた白の内側に隠されているなんてお伽噺みたいだな、とディーノが呟くように言っていた。

「だって…絵の具にニスが染みてるとか、言ってたって」

「ただこれは解けない魔法だ、それがつらい。」

「鑑定士なんかに見せるからだよ、修復家に見せるべきだ」あれは破壊された絵画ではない。

「修復家…」

炎真から教えて貰ったからツナにも分かる、直す職人だ。リポーンはあの絵を鑑定専門の方に見せたのだろうか、それとも違う人なのだろうか。ディーノは最後は『宝守』だったと言っていた、それって何者？ 炎真は知っているだろうか。ツナは考え込む、リポーンが時間を掛けてしてきた鑑定結果を信用しないんじゃない、鑑定と修復どちら側でも同じ意見なんだろうし、それを否定する気だつて全くない、けれど…。

「骸は、確かめることが増えたって…」

——意味深なことを言ってたんだよなあ、爺さんが。

ディーノの言葉が蘇る。

かたんと音がして視界が歪んだようになる。

「すごいのは、恐らく、隠す技術だ」

落ち着いた雲雀の音が、どうしてか空気に圧されそうな機内でまったく自由に浮いていた。

「X線や赤外線を欺いたんだろう？ 目だけでなく技術力がなければ分からないようにわざと施した」

『術をかけたのは誰だ』

音も少なく、滑走路を走っている感触も体に響かず、ふと気付けば雲の上に突き出ていた。

「…ヒバリさん」浮くような感覚、何とかできるような気がしてきた。

いや、頑張り次第で、きつと出来る。

外の雲は掴もうとしても掴めないけれど目の前の雲のひとはそうじゃない。ツナは手を伸ばす、雲雀は何？と返事をする。漸く目を覚ましたね、と笑って（いるようにツナには見えた）、それから愛用の武器でごとんと額を叩いてくれた。

《まだ続く》… 120417